

資料館だより

第 67 号

2011.3.1

目 次

草創期江戸大絵図の魅力と可能性	2
上行寺移転の経緯	
大名家の屋敷地取得と寺院の移転 その1	3
江戸の動物 —スズメ—	4

慶應義塾図書館旧館のステンドグラス	5
昔、新橋は海だった？	
コーナー展「愛宕下の武家屋敷跡2」より	6
愛宕山にあったタワー	
明治の高塔ブームの中で	7



『乃木文庫』修理事業完了

赤坂九丁目に所在する「旧乃木邸」(港区指定有形文化財)は、陸軍大将乃木希典の住宅で、明治35年(1902)に建てられ、明治45年9月、明治天皇崩御に殉じて自刃した場所です。希典の死後、その遺言により邸内にあった数多くの文書類は学習院と長府図書館へ寄贈されました。当館が所蔵する『乃木文庫』全556点は、寄贈された文書の中で長府図書館が不要と判断した文書類で、住宅とともに東京市へ寄贈され、その後港区に所管変えになったものです。

昭和60年(1985)、長期間邸内に保管されたままであったこの文書類の状態が極めて悪化していることが確認されたため、保管場所を本館に

移し、管理しました。虫損や腐食の進んだ資料も多く、そのままの状態では、永く保存・利用することができない状況でした。そのため平成8年度から全点の修理事業を開始し、15年をかけ、今年度すべての修理が完了しました。

これまで、当館では『乃木文庫』を非公開としてきましたが、閲覧可能な状態になったことにより、調査・研究を目的とした利用に限り、来年度から公開していくこととしました。

また、来年度からは、乃木希典夫妻の葬儀に際し、全国から寄せられた追悼文を中心とした『乃木家葬儀関係文書』全532点の修理事業を開始する予定です。

草創期江戸大絵図の魅力と可能性

小林 信也

(江戸・都市史研究者)

近世初期の江戸図の歴史上で、「江戸図の祖(おや)」とも称される「寛文五枚図」が寛文10(1670)年に刊行されたことは一つの画期ですが、近年同図に先立って作られたいくつもの江戸図が注目されています。江戸の全体図として現存最古とされる「寛永江戸全図」(白杵市立白杵図書館所蔵)の「発見」も話題となりました。こうした江戸の全体図は、大きく分けて①「寛永江戸全図」を含む寛永正保図(「正保図」)群、②大型明暦図群、③「万治年間江戸測量図」の三つのタイプが現存しています。

以下②大型明暦図群の中から「明暦江戸大絵図」(三井文庫所蔵、復刻書籍版は之潮刊、2007年)を紹介します。同図は、もともと明暦3(1657)年正月の大火以前に作られた図に、大火後の同4年2月までの江戸の復興・改造の情報が加筆され成立したものです。同図をめぐっては二つの謎が存在します。

一つめは、この図を作成したのは誰か、という作成主体の謎です。二つめの謎は、図の内容についてです。先行して作られた①寛永正保図群と比較して、江戸周辺部の地形や方位などの正確さは格段に進歩しているにも関わらず、中心部の江戸城付近は、実際の地形と比較すると大きく南北に引き伸ばされていて、①寛永正保図群と比べると退行しています。当時、江戸全体図の系譜とは別に、もっと狭い範囲の江戸を描いた寛永描図群がすでに刊行されていましたが、「明暦江戸大絵図」に描かれた江戸城付近はこれらの寛永描図群と似ています。こうした進歩と退行の奇妙な並存が二つめの謎なのです。

一つめの作成主体の謎は、図中の武家屋敷の区画に記入された表示から解くことができます。ほとんどすべての屋敷に、拝領した大名や幕臣の名前が記されていますが、いくつかの屋敷に

は名前が記されておらず、「御上屋敷」などのみ表示されています。これは、同図の作成主体が自らの名前を自明として省略したものと考えられます。こうして名前が省略された屋敷の拝領主の紀州徳川家こそが作成主体であるという説が従来から提示されてきました。

筆者は名前の省略以外に、敬称の有無にも注目しています。敬称を付されるのが通例の將軍家の関係者以外に、紀州徳川家の関係者にも敬称が付されています。ここから紀州徳川家が作成主体であるという説が、より確かなものとなります。同図を幕府が作成したとする別説は、訂正されるべきでしょう。

作成主体が紀州徳川家であるならば、二つめの謎に対して、次のような仮説を立てることができます。幕府が作成した①寛永正保図群と比べて後発の「明暦江戸大絵図」の作成過程では江戸周辺部の測量作業をより充実させることができたものの、江戸城付近での測量作業は紀州徳川家にとって憚るべきものでした。そのためやむをえず江戸城周辺は既刊の寛永描図群を参考に描いたのではないのでしょうか。

この「明暦江戸大絵図」がさらに興味深いのは、明暦大火後の復興過程で屋敷の移転先に関する大名たちの希望や幕府用地の利用計画の情報が、貼紙などの形で載せられている点です。幕府中枢で管理されていた筈のこれらの重要情報がこの図に記されているのはなぜでしょうか。

地図上のそれらの小片の紙を眺めると、次のように考えられます。同図は明暦大火直後に紀州徳川家から幕府へ緊急に提供されたものではないのでしょうか。そのように考えると、江戸城西丸御殿のどこかでこの地図を取り囲んだ幕閣たちが、江戸の復興について活発に評議している光景がよみがえってくるようにも思えます。

上行寺移転の経緯

大名家の屋敷地取得と寺院の移転 その1

竹村 到

(文化財保護調査員)

江戸時代、芝二本榎^{にほんえのき}に上行寺という日蓮宗の寺院がありました。もともと小田原で創建されましたが、慶長元年(1596)に江戸桜田へ移転後、八丁堀、芝伊皿子、芝二本榎と数度にわたって移転をしました。

このうち寛文8年(1668)の伊皿子から二本榎へ移転には、その背景に不明な点がありました。発掘調査を実施した段階では、上行寺の移転前、同地に何が存在したのかも良くわかっていませんでした。調査報告書には、江戸後期の文献に「同年(寛文8年)類焼仕り、この地松平新太郎(池田光政)殿と替地」とあるのを根拠に岡山藩の屋敷地であったとする見解と、発掘調査で「元和10年(1624)の墓石が発見され」たため、「上行寺以前にも寺社があった」との見解の二つが提示されています(註1)。

しかし、岡山藩池田家文庫(岡山大学附属図書館所蔵)の中に、この寛文8年の移転の経緯を示す史料(「芝日蓮宗上行寺屋敷一件」)が残されていました(註2)。以下、その史料に基づいて、上行寺の移転経緯を見ていきましょう。

結論から先に述べると、上行寺は岡山藩池田家との替地によって移転したことは事実ですが、寛文8年当時、そこは岡山藩の土地ではありませんでした。当時、そこには覚真寺と常泉寺という二つの寺院がありました。

では、なぜそこが覚真寺と常泉寺の土地であったにもかかわらず、岡山藩と上行寺の替地ということになったのでしょうか。実は、岡山藩は伊皿子にある上行寺の土地の取得を目指していました。その土地を取得するためには、上行寺の移転先を用意する必要がありました。その移転先の候補地としたのが二本榎にある覚真寺と常泉寺のある場所だったのです。

覚真寺は、仲介役となって岡山藩と交渉しま

した。覚真寺は、自身と常泉寺の本寺と檀家に了承を得た上で、幕府に届け出てその許可をとりました。そして、両寺の土地3184坪余を岡山藩へ提供しました。

岡山藩は、「覚真寺・常泉寺の替地には、下谷の御屋敷の内にて下さるべく候」と、当時所有していた下谷下屋敷の土地から両寺の移転先を用意しました。ところが、両寺は「居馴れ候ところの近所」でないため困ると、その提案を断り、覚真寺は大乘寺と、常泉寺は相福寺とそれぞれ交渉をおこない、岡山藩に提供した土地の近所に自分で寺地を取得したのです。

これをうけた岡山藩では、引越料として覚真寺に金1147両余を、常泉寺に金300両を貸与しました。その上で、もし岡山藩が二本榎の近所で屋敷地を得た場合、そこから両寺の寺地を渡す約束をしました。その際には、貸与金の半額を返納することも決められていました。

つまり、覚真寺と常泉寺の寺地は一旦岡山藩の土地とされ、その上で上行寺へ提供されました。そのため上行寺の移転前、そこには覚真寺と常泉寺がありましたが、手続きの上では岡山藩と上行寺との替地となったのです。

また、この移転先には上行寺が年貢を負担しなければならぬ土地が含まれていましたが、この年貢代は岡山藩から支払われ、上行寺の負担にならないよう配慮されていました。

このように寛文8年の移転がおこなわれ、これ以降上行寺は二本榎に定着したのです。

(註1)『上行寺跡・上行寺門前町屋遺跡発掘調査報告書』

(2006年)。発掘調査は2001・2002年におこなわれた。

(註2) 資料番号:P1-214。閲覧は早稲田大学中央図書館マイクロ資料室所蔵のマイクロフィルム版を利用した。

【参考文献】拙稿「上行寺移転に関する若干の考察」

『研究紀要』13号掲載予定、2011年3月)。

江戸の動物

— スズメ —

山根 洋子
(文化財保護調査員)

四季を問わず日本各地に生息するスズメは、農村部では稲を狙う害鳥として疎まれ、人々はその対策に追われています。一方、港区のような街中のスズメは、暮らしの風景に溶け込むようにいながらも、意識されることが少ない動物ではないでしょうか。

おそらく、江戸時代のスズメも現代と同じように地域や暮らし方によって様々な見方をされていたと思われますが、江戸の町には特別な扱われ方をしたスズメが存在しました。

江戸の遺跡では、ガンやカモなどの野鳥やニワトリ・シャモなどの家禽^{かきん}といった、食用にされたと思われる鳥類の骨がよく出土します。中には自然死した野鳥などが見つかることもありますが、スズメの骨は小さく繊細であるためか、確認できることがほとんどありません。ところが、スズメの小さな骨が多量に見つかり、このことが江戸の歴史における興味深い事象を物語る例があります。

千駄木三丁目北遺跡は荒川区や台東区にほど近い、文京区北東部に位置する江戸時代の遺跡です。この遺跡で検出された一つの遺構から112点もの鳥骨が出土し、ニワトリ・ハト・カモ・カラス・スズメの5種が含まれていたにもかかわらず、その9割近くの99点がスズメと同定されたのです。しかも、出土したスズメの部位は上嘴^{じょうし}・下嘴^か（くちばし）、尺骨^{しゃつこつ}・中手骨^{ちゅうしゅこつ}（翼の部分）、脛骨^{けいこつ}・中足骨^{ちゅうそくこつ}（脚）に限られていました。中手骨の数が多く、この骨には完全な形のものが見立つのですが、尺骨と脛骨は遠位部（指に近い方）のみが確認されています（註）。つまり、頭の他には翼や脚の先の方の骨だけが出土したということです。

ここでまず不思議なのは、他の遺跡であまり見られないスズメがまとまって多量に出土した

こと、そして出土した部位に偏りが見られることです。実はこれらの状況は、当遺跡が享保6年（1721）から幕末まで徳川幕府の役職である鷹匠^{たかじょう}の屋敷であった、ということに起因します。鷹匠とは鷹の世話、要するに飼育や調教などを行う人たちであり、出土したスズメの骨は鷹匠がタカに与えた餌の残骸と考えられるのです。部位の偏りについては、タカがスズメを食べた時に出した食べかすと考えることもできますが、ある文献には、餌となるスズメやハトの首、両翼、両足をタカの目の前で取る、と記されており、人の手でスズメを解体していたことがわかります。この記述から、当遺跡で出土したスズメの骨は、タカに餌として与える前に可食部分の少ない部位を処理し、その際に出たゴミと推測できるのではないのでしょうか。

江戸の遺跡で一般的に確認される鳥類の大半は人々の食膳に上ったものです。しかし、上記の千駄木三丁目北遺跡と同様に鷹匠屋敷跡である文京区動坂遺跡^{どうざか}ではスズメとハト、鷹狩りの際の陣屋跡である葛飾区葛西城址ではカラスの骨が多いことが報告されています。これらもタカの餌と考えられ、このような鷹狩りに関連する遺跡では、人々の食料ではなく、人以上に大切にされたと言われる「鷹狩のためのタカ」の餌となったスズメなどの鳥の骨が多量出土するという、特殊な状況を示すことがわかってきました。

小さな動物の骨は発掘調査時に見落とされがちで、さらにはその骨の同定や観察は難しい作業ですが、本例のように小さなスズメの骨でも、その土地の歴史や文化を解明するための貴重な資料となるのです。

（註）上肢骨（翼）は上から上腕骨^{とうこつ}・橈骨^{たうこつ}・尺骨・中手骨、下肢骨（脚）は大腿骨・脛骨・中足骨、の順に連なっています。

慶應義塾図書館旧館のステンドグラス

川上 悠介

(文化財保護調査員)

国指定重要文化財である慶應義塾図書館旧館は、明治45年(1912)に曾禰中條事務所の設計で建設された建物です。地下1階・地上2階建てのレンガ造で、関東大震災、第二次世界大戦による2度の被災を受けていますが、建設当初の形をよく残しています。

玄関を入り広間を直進すると、突き当たりに階段室があります。2階へつながる階段の手摺も装飾が施された美しいものですが、吹き抜け空間に設置されたステンドグラスの大きさと美しさに圧倒されます。現在のステンドグラスは、昭和20年(1945)の戦災で失われ、昭和49年に復元されたものです。

戦災前のステンドグラスは大正期に設置されたもので、大正5年(1916)3月発行の『建築雑誌』の「時報」欄に完成を報告する記事が掲載されています。ステンドグラスの原案は、洋画家和田英作によるものです。和田の原案は数点あり、そのうちの1点が大正4年5月に決定されます。

図案決定後、日本のステンドグラス製作の草分け的存在であった小川三知^{さんち}によって製作が開始されました。その大きさは、高さ3間半(6.3m)・幅1間半(2.7m)と大きなもので、同年12月末に製作が終わりました。このステンドグラスは小川が11年に渡る留学(明治44年11月帰国)から帰ってきて、日本で活動を始めた頃の作品にあたります。小川はこの製作にあたり、「多年の製作中最も苦心を要し且つ非常に興味を感じて」いたようです。

この作品完成を記念し、図書館では「建築装飾に関する図書および参考品」の展覧会が開催されました。この会期は、大正5年2月9日から20日までで、2月16日には和田英作と小川三知によるステンドグラスに関する講演会も開

催されました。展示品には、和田によるステンドグラス図案下絵数種、小川のステンドグラス用材及び器具、河辺正夫所蔵のラファージ(小川の師)の遺筆ステンドグラス図案2点、小川が滞米中に製作した模写十数枚及び、図書館所蔵の美術書を展示していたようです。

今考えるといずれも貴重な資料のように聞こえますが、当時の『建築雑誌』の記事では、美術科や建築科を持っていない慶應義塾であったことを加味しても「表題に比して、内容甚だ振はざるものであった」と厳しい批評が掲載されています。このときに展示されていたと思われる和田の原案は、採用案と習作共に現存し、今なお慶應義塾が保存しています。採用案は建物とともに重要文化財に指定され、歴史ある大学ならではの貴重な資料となっています。

昭和20年5月の空襲で、図書館のステンドグラスは破損し、透明のガラスが設置されたままとなっていました。建物は、昭和44年に国の重要文化財として保存が決定されます。これを知ったステンドグラスの職人であり、小川とも縁のあった大竹龍蔵の復元の申し出によって、和田の原案を基にステンドグラスが昭和49年に復元されました。このように、現存するステンドグラスは建設当初のものではありません。しかし、復元されてからすでに30年以上が過ぎ、小川の作品よりも長い期間、図書館の階段室を飾っていることとなり、その価値は時間と共にますます高まっているといえます。

大正5年の展覧会は、厳しい批評を受けましたが、展覧会が開催されていなかったら、原案は人知れず失われ、60年後の復元にもつながらなかったかもしれません。歴史的な視点から見ると、大変価値の高い展覧会であったと位置づけることができるのではないのでしょうか。

昔、新橋は海だった？

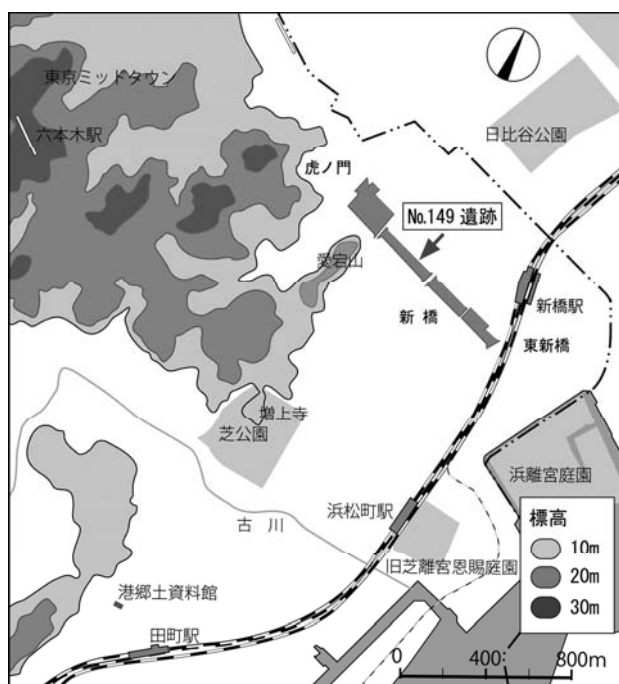
コーナー展「愛宕下の武家屋敷跡2」より

杉本 絵美
(文化財保護調査員)

平成 23 年 1 月 21 日から 2 月 16 日まで、コーナー展では「愛宕下の武家屋敷跡 2」を開催しました。「愛宕下」とは、江戸時代に愛宕山の北東側付近を指した呼び名で、現在の新橋・西新橋付近に相当し、当時は大名屋敷や旗本屋敷が並ぶ武家地でした。

この展示は、環状第二号線の再開発事業（新橋四丁目・西新橋二丁目・虎ノ門一丁目）に伴い発掘調査がおこなわれた No.149 遺跡の成果を紹介するもので、昨年度に続き今回が 2 回目の展示となります。

発掘調査は東京都埋蔵文化財センターによって平成 16 年 1 月に開始され、平成 23 年度まで行われる予定で、これまでに主に武家屋敷に関わる遺構（礎石・土蔵・水道施設・屋敷境・池など）が発見された他、縄文土器や弥生土器、川の流路の跡や、沿岸部の埋め立てに関する遺構を確認することができました。



遺跡の位置

氷河時代の地球は氷期と間氷期が交互に訪れ、氷期には海水面が下がる「海退」、間氷期には海水面が上がる「海進」という現象が繰り返されていました。「海退」が最も進んだのは今から 2 万年前で、現在の東京湾は陸地となっていました。その後は海進に転じ、今から 6000 年前に最も「海進」が進み、関東では現在の群馬県付近まで海が入り込んでいたと考えられています。

港区でも現在の海岸線から直線距離でおよそ 3.5 km 離れた青山墓地で縄文時代の貝塚が発見されており、内陸まで海が入り込んでいた時期があったことがわかります。この頃は新橋のあたりも海であったようです。

その後再び「海退」が始まり、陸地化が進みます。現在の日本橋から東新橋にかけて北から南方向に伸びる半島が現れ、その西側の丸の内から新橋・浜松町付近にかけては海が残っていたと考えられ、この海を「日比谷入江」、半島状の陸地を「江戸前島」と呼びます。

この「日比谷入江」は、徳川家康の入府以降におこなわれた江戸城下町の整備に伴う埋め立てによって陸地となり、武家地として利用されます。

発掘調査では、黒色や灰色の粘土質の自然堆積層の上に、この地に元々あった土ではない褐色のローム質の土が人工的に積まれていることがわかりました。つまり、江戸初期に「日比谷入江」を埋め立てた姿が見つかったのです。

自然堆積層は現地表面よりおよそ 2m~3m の深さで確認されました。現地表面の標高はおよそ 2m~4m で、自然堆積層が確認された現地表面からの深さを考えると、「日比谷入江」はその大部分が浅瀬や干潟であったようです。

【参考文献】『港区埋蔵文化財調査年報』 7

(港区教育委員会、2010 年)。

愛宕山にあったタワー 明治の高塔ブームの中で

大坪 潤子
(文化財保護調査員)

来春開業予定の東京スカイツリー（墨田区）。建設中から見物に訪れる人が後を絶ちません。そびえ立つ高い塔は、時や場所を超えて多くの人々を惹きつけるもののようです。

港区では昭和33年（1958）に東京タワーが開業しますが、実はこれより約70年前の明治22年（1889）にも「タワー」が誕生していました。その名は愛宕塔。愛宕山の山頂、現在NHK放送博物館がある場所へ「有限会社愛宕館」によって愛宕館と共に建てられた塔です。愛宕館・愛宕塔については本誌49号（平成14年8月）にも記事がありますが、今回、最近の調査によって判明したことを加え、改めてご紹介します。

愛宕館と愛宕塔は隣接し、館では貸座席や食事の提供、塔では「高塔登覧」が目的とされました。発起人代表は米穀商・山田忠兵衛と医師・松山棟庵。いずれも芝地域で活躍した人物です。

港区（芝）の愛宕山は、慶長8年（1603）に徳川家康が京都から愛宕権現を勧請したのに始まる、徳川将軍家や江戸市中の火伏せ（防火）信仰の場でした。また、山頂からの見事な眺望や「出世の石段」と呼ばれる急峻な階段（男坂）が有名で、多くの錦絵に描かれました。幕末、水戸浪士が井伊大老襲撃（桜田門外の変）前に集結したことで知られています。

明治19年（1886）、その愛宕山頂に愛宕公園が開かれ、3年後の12月、公園内に愛宕館と愛宕塔が姿を現しました。愛宕館は2階建て、愛宕塔は5階建てで約30mの高さでした。開館にあたっての新聞広告（明治22年12月）には「本館並高塔ノ建築粗落成候ニ付来ル廿二日ヨリ仮開館致シ」とあり、完成前に急いで営業を始めたことがわかります。これより少し前、浅草寺の五重塔が修復時に見物客を足場に登らせたところ大好評、これを受けて大阪には「南の五

階」「北の九階」と呼ばれた塔が相次いで開業し、世の中は高い塔が流行していました。そして、浅草では当時の超高層建築といえる12階建て（約52m）の凌雲閣の建設が始まっていました。愛宕塔にとって強力なライバルで、こうした状況の中、開館を急いだのかも知れません。

愛宕塔では登覧料を支払い、螺旋階段で昇り降りしました。途中階には写真額や休憩所などがあり、4、5階からは遠く房総半島や浜離宮、帝国ホテル、ニコライ堂などが望めたそうです。

しかし、愛宕館は明治30年（1897）頃に廃業します。大正期には佐賀県出身の松尾寛三が所有し「愛宕ホテル」として営業していましたが、前後を含め詳しい事は判っていません。一方、愛宕塔は愛宕館廃業後も営業を続けたものの、関東大震災で倒壊してしまいます。明治の高塔ブームの中に現れ、34年間で姿を消した愛宕塔。愛宕山からの眺めと同じく、現在ではその存在自体が幻のようです。

港郷土資料館では、今秋、愛宕山をテーマにした特別展を開催します。愛宕塔・愛宕館をはじめ、愛宕山にまつわる資料や情報、思い出をお持ちの方はぜひお知らせ下さい。



愛宕館と愛宕塔

原田真一編

『東京名所図絵』

双々館刊

明治23年2月

事業予定 (平成 23 年 3 月～)

コーナー展

- ・「考古資料で見る近代史」 開催中～4月20日
- ・「江戸開府前の港区」 4月22日～6月15日

講座など

- ・資料館講座 「近代教育と港区」(全3回)
3月4・11・18日
- ・土曜体験教室 「古代のアクセサリを作ろう！」
4・6・9・12月・平成24年2月
- ・古文書講座 6月～7月頃開催予定

- ・上記の事業以外にも、親子学習会・夏休み学習会などさまざまな事業を予定しています。事業の詳細は、『広報みなと』や郷土資料館ホームページをご覧になるか、当館までお問い合わせください。
- ・当館のホームページにて刊行物の一覧を掲載しています。販売は、展示室横の事務室、または郵送にておこなっています。

刊行物案内

『江戸図の世界』〈特別展展示図録〉

平成 22 年度に開催した特別展「江戸図の世界」の展示図録。当館所蔵の江戸図を含め、主要な江戸図を一覧することができます。(頒布価格 1200 円)

【平成 23 年 3 月末刊行予定】

『研究紀要 13』

前号から続く品川台場築造日記の翻刻、齋藤茂吉宛ての妻輝子書簡(新出資料)の紹介のほか、宇和島藩伊達家の食生活に関する論考、上行寺移転に関する論考を収録します。(頒布予定価格 1000 円)

『増補 港区近代沿革図集 総索引』

5 年間にわたって刊行してきた『増補港区近代沿革図集』の総索引。これにより、地名・建物などさまざまな語彙による検索が可能となります。(頒布予定価格 未定)

事業報告 (平成 22 年 10 月～平成 23 年 2 月)

特別展「江戸図の世界」を開催しました。

昨秋 10 月 23 日(土)から 11 月 28 日(日)まで、平成 22 年度特別展「江戸図の世界」を開催しました。

本展では、当館の所蔵資料を中心に代表的な江戸図を一同に集め、江戸図の歴史とその特徴・種類、および様式の変遷などを 7 つのテーマにわけて紹介しました。とりわけ、会場の中央床面に展示した「安永手書江戸大絵図」(当館蔵)は、そのあまりの大きさに多くの来館者から驚きの声があがりました。

本展には 3000 名を超える方々にご来館いただきました。また、会期中に 2 回開催した展示説明会は、会場に入りきらないほどの多くの方で賑わいました。

また、関連事業として資料館講座「江戸図の世界」(全 3 回)を開催し、当館のコレクション、江戸図の最新研究を学んだあと、最終回では資料館を飛び出して、実際に切絵図を手にして町を巡りました。この講座の一端については、本誌 2 頁の小林信也氏の記事をご参照下さい。

①資料館講座「江戸図の世界」(全 3 回)

11 月 5・12・20 日

②土曜体験教室「古代のアクセサリを作ろう！」

10 月 2 日・12 月 11 日・平成 23 年 2 月 26 日

③コーナー展「指定文化財展」

平成 22 年 12 月 4 日～平成 23 年 1 月 19 日

④コーナー展 「愛宕下の武家屋敷跡 2」

平成 23 年 1 月 21 日～ 2 月 16 日

港区立港郷土資料館の利用案内

交通 JR「田町」駅下車徒歩 5 分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3 出口)徒歩 2 分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩 2 分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩 2 分、「田町駅西口」停留所下車徒歩 3 分

開館時間 9:00～17:00

休館日 日曜日・祝日・第 3 木曜日
年末年始・特別整理期間
(臨時休館などは HP などで随時お知らせします。)

入館料 無料



『資料館だより』第 67 号
平成 23 年(2011)3 月 1 日発行
編集・発行 港区立港郷土資料館
〒108-0014
東京都港区芝 5-28-4
Tel. 03-3452-4966
Fax. 03-5476-6369
<http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/>

刊行物発行番号 22091-7541